

まち

No.1 2013年 春季号

発行日：平成25年6月1日
発行：日本大学理工学部まちづくり工学科教室
☎03-3259-0531(学科事務室)
発行責任者：横内憲久(教室主任)
編集担当：阿部貴弘
制作：株式会社 ムーンドッグ

contents

主任あいさつ	1
スタッフ紹介	2
新入生の様子	10
年間学校行事	10
まちづくりニュース	11
コラム〈私とまち〉	12
ロゴマーク紹介	12

主任あいさつ

伝統を紡ぐ一歩目の“まち科”の皆さんへ

まちづくり工学科主任 教授 横内 憲久

学生諸君そしてご父母等ご関係の皆さん、日本大学理工学部まちづくり工学科へのご入学おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

さて、理工学部は大正9(1920)年に開設し、今年で93年の長い歴史を誇ります。卒業生は20万人を超えるといわれ、理工学系の産・学・官すべての分野で中枢を占めるまでになっています。その歴史の中で、最も新しい学科が「まちづくり工学科」(まち科)です。4月に入学した1年生83名は、まさにまち科第1期生となります。われわれまち科スタッフも同様に第1期生となりますので、皆さんと一緒に素晴らしい最高の学科をつくり上げる努力をいたします。ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

いま、なぜ「まちづくり」なのか

まち科開設の最も大きな要因は、近年のわが国の社会・経済状況の激変にあります。戦後、わが国は技術力をエンジンに、高度経済成長期を経て、1990年初頭にはじけたバブル経済期まで、一貫して経済成長を続けてきました。しかし、1990年代から現在まで数10年間、ほとんど経済の成長(名目GDPは1995年以降500兆円前後を推移)は止まりました。また、人口も21世紀に入り初めて減少し、少子化は高齢者比率を高め、わが国は長く続いた成長時代から成熟時代に入ったのです。一方、情報化社会(ICT)の進展は、国内外や大都市、小都市といった地理的格差を無くしつつあります。さらに、1995年に起きた阪神・淡路大震災や2011年の東日本大震災・原発事故などに伴う、まちの復旧・復興計画のあり方の議論も社会の変革の要素に挙げられましょう。

このように、経済成長の停滞、人口構成の偏りや福祉の充実、成熟化社会の台頭、ICTの進化、災害の最小化、そして1970年代から続く環境問題の解決などが激変の要因といえます。これらはすべてが複雑に絡み合っており、いまのわれわれの暮らしの中で起こっていることなのです。

そこで、これらの問題等を解決に向かわせるには、個別の技術の発展はもちろんのこと、生活のあり方を変えたり、見直したりすることが重要です。住み・働き・学び・遊ぶ、自分のまちの暮らしを快適にするには、まちを構成するハード(建物・土木構造物・公園など)と住民の暮らし方であるソフトがうまくかみ合ってこそ達成するものです。まちづくり工学は、このハードとソフトの技術をよく理解して、それを地場産業の育成とともに地域に適合するように計画・デザインをする技術なのです。

このようなことから、まちづくり工学科は時代の要請を受けて開設したといえます。

まち科学生諸君へ

理工学部が新学科を創設したのは、実に35年ぶりになります。理工学部の期待を込め、将来を見据えてつくられたまちづくり工学科は、年々その社会的役割が高まっていくとわれわれは確信しています。そして、1期生83名から数え、10年後は1000人を超える卒業生を輩出し、まち科ならではの伝統や文化もつくり上げられるでしょう。

平成25(2013)年は、その伝統を紡ぐための礎をつくる重大な出発点です。まずは4年間、精一杯の活躍を祈っています。

スタッフ紹介

教授 **青木 和夫** 博士(保健学)



専門：健康工学、人間工学

- ・健康増進の方法と生活環境
- ・高齢者や障害者を支援するアクセシブルデザイン
- ・ストレスの予防とリラクゼーションのための環境

経歴：

茨城県立水戸第一高校－東京大学医学部－同大学大学院医学系研究科保健学専攻博士過程。東京大学医学部助手、日本大学助教授を経て、1996年より日本大学理工学部教授、現在に至る。

主な学外・学会活動：

- ・一般社団法人日本人間工学会 理事長
- ・社団法人埼玉県医師会産業保健委員会 委員
- ・財団法人パブリックヘルスリサーチセンター 理事 ほか

私の専門領域は人間工学と健康管理です。人間工学は人間と人工物や環境の関係を研究する学問です。また、健康管理は人間が病気になったり怪我をしったりしないようにすることです。

「まち」というのは人間が住むために作られた人工の環境ですから、「まち」とそこに住む人間の関係を研究するのは人間工学の研究の範囲に入ります。特に、住んでいる人が事故に遭わずに安全に暮らせる「まち」の環境を設計すること、そして、そこに住む高齢者や障害者や妊婦や子どもなどが安全に快適に暮らせる「まち」を実現することが人間工学の大きな課題のひとつとなっています。バリアフリー・デザインやユニバーサル・デザインがその例です。

健康管理とまちづくりの関係は、生活習慣病やメタボリックシンドロームと関係しています。メタボリックシンドロームは肥満や高血圧、脂質異常、糖尿病のうち2つ以上が合併した状態をいい、これを防ぐためには日常生活で運動を行うことが有効であることがわかっています。つまり、生活の中に運動のできるような「まち」の環境を作ってゆくことが健康につながるのです。

このような健康で安全に暮らせる「まち」を皆さんと作っていきましょう。

パリの警察官はさすがにおしゃれです。と同時に、自転車でのパトロールは健康のためにもよさそうで、皆スマートです



教授 **天野 光一** 博士(工学)



専門：景観工学、観光計画

- ・美しいまちをつくるための景観政策論
- ・地方活性化のためのリゾート計画論
- ・持続可能な観光計画論

経歴：

開成高校－東京大学工学部土木工学科－同大学院工学系研究科土木工学専攻修士課程。建設省土木研究所道路部研究員、フランス都市・交通・住宅省都市交通研究所研究員、建設省道路局企画課課長補佐、東京工業大学工学部助手、日本大学理工学部専任講師、同助教授、東京大学大学院工学系研究科社会基盤工学専攻助教授、フィリピン大学客員教授（JICA 専門家）を経て、2001年より日本大学理工学部教授、現在に至る。

主な学外・学会活動：

- ・土木学会景観・デザイン委員会 委員長
- ・東京都 板橋区 都市景観審議会 副会長
- ・静岡県 都市景観賞審査委員会 委員
- ・静岡県 富士宮市 都市景観審議会 会長 ほか

東京は足立区千住という下町の生まれである。子供のころからまちなかを歩き回るのが好きで、路地裏でおじさんおばさんたちが井戸端会議に興じている光景が好きだった。大学に進学し先輩の警咳に接したことが原因で景観を専門にするようになった。その後、景観やまちづくりの興味から、全国を旅し、その土地の風景を体験し、泊まり、飲みかつ食らい、地元の人々と語らった。その経験は興味深いものであったが、風景やまちの状況は、これで良いのかと考えさせられる場所も多々あった。フランスでの一年の滞在の後、パリのような著名な大都市だけでなく、フランス国内の「フランスの最も美しい村」をはじめとする小さな村を訪ねるようになった。そこでは、風景は美しく、食事もワインも申し分なく、地元の人々は自分の村に誇りを持っていた。日本でこのようなまちづくりができないのかと感じた。そのようなまちづくりをするための人材を育てる教育機関が「まちづくり工学科」であると考えている。本学科に所属する諸君らがいかに学び、社会に出ていかに活躍するかが、日本の「まち」の将来を決めるといっても過言ではない。私たちと問題意識を共有し、美しい、まち、地域、国土を実現させようではありませんか。

フランスアルザス地方のリックヴィル



教授 **城内 博** 博士(医学)

専門：安全工学、産業保健

- ・まちで働く人の安全と健康
- ・化学物質の健康及び環境影響評価
- ・災害からまちと人を守るハザードコミュニケーション

経歴：

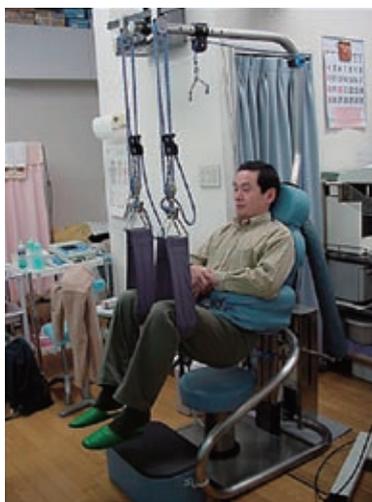
岩手県立宮古高校－早稲田大学理工学部－同大学院理工学研究科応用化学専攻博士課程前期－秋田大学医学部。厚生労働省産業医学総合研究所を経て、2002年より日本大学理工学部教授、現在に至る。

主な学外・学会活動：

- ・国際連合 TDG/GHS 専門家委員会 日本代表
- ・厚生労働省薬事・食品衛生審議会毒物劇物部会 委員
- ・日本医師会産業医学講習会 講師
- ・看護・介護用マットレス メディマットの開発 ほか

私が20代前半のころは公害問題に取り組みたいと思い応用化学を学んでいました。ところが社会状況や能力不足が重なり、専門を活かせる会社に就職することができませんでした。その後医学部に進み、働く人の安全・健康を研究することになりました。私の目はどうやら技術の進歩の中で置き去りにされてきた問題に向かうようです。これらには国やまちの制度に係る問題も、身近な問題もあります。私のまちづくりでのテーマは安全・健康ですが、大きく2つの方向があります。ひとつは危険有害なものについての情報共有のシステムを作ること。実際には関連する法規制の改正や日本工業規格 (JIS) の策定などがあります。もうひとつは健康に生活するためのヒントや用具を提供することで、これには電磁場の健康影響などに関する啓蒙教育、さらに腰痛治療器 (写真) や介護用品の開発があります。

この「まちづくり工学科」は前例のないさまざまなスタッフやカリキュラムで構成されています。つまり新入生の皆さんは私たちスタッフの専門分野の域を超えて、活躍の場をいくらかでも広げる可能性があるということです。パイオニアの自覚を持って10年後、20年後を見据えて勉強してほしいと願っています。



開発した腰痛治療器プロテック



教授 **高村 義晴** 博士(工学)

専門：まちづくり、都市計画／都市開発、地域再生、国土／地域政策

- ・右肩下がりの社会における持続可能なまちづくり手法の開発
- ・中心市街地・郊外型住宅団地等の疲弊地区の再生
- ・ライフスタイルのブランド化による地域づくり
- ・コミュニティビジネス・ソーシャルビジネスによる地域再生
- ・住民による住民のための「新たなまちづくり主体」の形成

経歴：

福井県立高志高校－金沢大学工学部土木工学科－同大学院工学研究科土木工学専攻修士課程、東京大学博士号取得 (2001年)。建設省入省、盛岡市開発部長、国土庁大都市圏課長補佐、建設省建設経済局調整課調整官、船橋市建設局長、群馬県都市計画課長、広島市都市計画局長、首都高速道路公団計画部調査役、岐阜市助役、山形県土木部長、内閣官房地域活性化統合事務局参事官、福山市立大学を経て、京都大学経営管理大学院経営研究センター特命教授、現在に至る。技術士 (建設部門)

主な学外・学会活動：

- ・地域活性化伝道師 (内閣官房地域活性化統合事務局)
- ・岩手ソーシャルビジネススクール塾長 (インキュベーション担当)
- ・福山市政策顧問
- ・天草市二地域就労事業アドバイザー ほか

“つねに目的意識と問題意識を持ち、新しい発想で、問題に改革意欲を持って挑む。” 民間企業の社員のことでない。某地方公共団体の採用案内にある、「求める人材像」です。いま官民間問わず、これまでのやり方を踏み出し、新しい発想と意欲に満ちあふれる「新しい人材」が希求されています。

これまで長く国に勤め、一貫して都市・地域問題に取り組んできました。この間、県のほか、政令市、大都市や地方都市の中核市でさまざまなプロジェクトを实践。現在、都市や地域の再生を主題に、新たな計画論・方法論の追究、市町村長を集めた全国的な会議や、復興支援に取り組む。その中で見つめてきたのは、現在の行政の進め方の限界であり、これまでの右肩上がりの社会の中で、築き上げられてきた方法論の不調です。都市の魅力・活力の低下、地方の停滞、地域の疲弊に歯止めがかからない今、その解決や緩和の担い手となる、新たなまちづくり人材が、「行政」「ソーシャルビジネス・コミュニティビジネス等の中間領域」「都市・地域づくりにかかわる民間領域」それぞれにおいて求められています。実践を通して得られた経験知を体系化し、次の時代に向け、新しいまちづくりの担い手を育て上げていくことが、これまで長く都市や地域の諸問題にかかわってきた、私の使命だと思っています。



市民の自慢をテーマに、岐阜の色、名物・技、こだわり、暮らしの楽しみを雄弁に語りかける岐阜駅前広場

教授 **八藤後 猛** 博士(工学)

専門：福祉まちづくり、建築安全計画

- ・高齢者、障がい者など、すべての人にやさしい生活環境とまちづくり
- ・誰にも利用しやすいまちづくりのためのサイン・情報システム
- ・安全・安心をめざした生活環境の安全設計と防犯都市の形成



経歴：

東京都立赤城台高校－日本大学理工学部建築学科－同大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程。国立職業リハビリテーションセンター研究部研究員、独立行政法人 高齢・障害・求職者雇用支援機構障害者職業総合センター適応環境担当研究員、日本大学理工学部建築学科助手、同専任講師、准教授を経て、2013年より現職、現在に至る。

主な学外・学会活動：

- ・日本福祉のまちづくり学会 理事、学術委員長
- ・元日本建築学会建築計画委員会ノーマライゼーション環境小委員会 主査
- ・国土省 高齢者・身体障害者等の利用を配慮した建築設計標準改訂委員 ほか

「さまざまな場所で、自分だけが利用できないという屈辱的な場面が多くあった」これは、私がつい昨日、ある会合に出席したときの参加者が言ったことばです。バリアフリー法が整備された後においても、彼が利用できない、させてもらえない場所はたくさんあります。彼は、明確に拒否のことばを浴びせかけられたわけではありません。

あなたが、まちを歩いていて、ある店だけは、そこであなたが食事することを拒んでいたとします。でも、入れる同じようなお店はたくさんあるのならそれでいいですか。仮に、世界で一件だけあなたを拒否しているお店があったらどうですか。「そんなところ、行かなければいい」と寛大な心でいることができるでしょうか。

そういうとき、人は屈辱感を味わうことになります。これは、相手を人間として認めていないということです。私の書いていることは、若くて元気なみなさんには大げさすぎると思うかもしれません。

でもみなさんには、決して人に屈辱感と喪失感を与えるようなまちをつくってほしくありません。「人間として尊重される」ために、その技術的な方法と同時にその大切さを4年間で学んでほしいと願っています。

日常的な風景となった特別な人のためのでない、誰もが利用できるための技術的方法は、意外と難しいのです



教授 **横内 憲久** 博士(工学)

専門：ウォーターフロント計画、都市計画

- ・ウォーターフロントのまちづくり
- ・水域の不動産的価値を高める方法論
- ・再開発とコミュニティデザイン



経歴：

日本大学第二高等学校－日本大学理工学部建築学科－同大学院理工学研究科建設工学専攻修士課程。日本大学理工学部建築学科助手、同海洋建築工学科専任講師、同助教授、同教授を経て、2009年より日本大学理工学部建築学科教授、現在に至る。

主な学外・学会活動：

- ・日本沿岸学会 副会長
- ・日本建築学会海洋建築委員会 委員長
- ・建築審査会 千葉県 副会長／船橋市 会長
- ・横浜市港湾審議会 幹事
- ・流山市都市計画審議会 副委員長
- ・(社)ウォーターフロント協会 理事 ほか

団塊の世代の生まれで、大学紛争真ただ中の1970年に理工学部建築学科を卒業し、大学院に進学して修了。そのまま建築学科の助手に就任。1975年建築雑誌「都市住宅」7月号(鹿島出版会)に、『特集 ウォーターフロント』を執筆。わが国の「ウォーターフロント」の名付け親となります。それから約40年間、「ウォーターフロントからのまちづくり」を標榜して、地域固有の歴史・文化を有する、水辺を活かしたまちづくりを実践しています。学生時代から、戸建て(点的空間)より、群建築(面的空間)のデザインに魅力を感じていました。たぶん、多くの人々や生活を対象とするほうが数段難しいとイキがっていたからでしょう。実作には、釧路フィッシャーマンズワフ、大阪南港(写真)、鹿児島・指宿市護岸プロムナード、東京・品川天王洲水上レストラン waterline などがあります。

さて、まち科第1期生の学生諸君。「まちづくり」はわれわれの生活が続く限り必要とされる創造的作業です。地域にとって、これで良いということはなく、常に更新を繰り返しますが、かけがえのない変わらないものも必要です。何を新たにし、何を守るか、この見極めがまちづくりプランナー・デザイナーとしてのプロフェッション(職業)といえます。この4年間、まちづくりのプロとなるべく、しっかりと基礎を身に付けてください。4年間はあっという間です。

大阪・南港コスモスクエアのグランドキャナル(大運河)の基本設計と約70ヘクタールの埋立地の全体景観計画を実施(写真2011年8月現在)



准教授 **阿部 貴弘** 博士(工学)



専門：都市史、地域計画

- ・歴史・文化をいざむまちづくり
- ・土地の記憶・まちの履歴をいかした都市設計
- ・持続可能なコミュニティ形成

経歴：

崇鳴高校—東京大学工学部土木工学科—同大学院工学系研究科社会基盤工学専攻修士課程。パシフィックコンサルタンツ株式会社、国土交通省国土技術政策総合研究所研究官を経て、2012年より日本大学理工学部准教授、現在に至る。技術士（建設部門）

主な学外・学会活動：

- ・土木学会土木史研究委員会 副幹事長
- ・土木学会土木史研究委員会 東日本大震災特別小委員会 幹事長
- ・土木学会選奨土木遺産選考委員会 委員
- ・群馬県富岡市 世界遺産まちづくり専門家会議 委員 ほか

私は、大学院修了後、民間のコンサルタントとして、まちづくりの実務に携わりました。その後しばらくして、国の研究機関に職を転じ、国家公務員として、国の立場から全国のまちづくりを支援するための調査・研究に取り組みました。そして今、大学教員として、これからのまちづくりを担う人材を育てる立場にいます。

こうした、産官学それぞれの立場を経験したからこそ言えること（言いたいこと）があります。

まず、まちづくり工学科のカリキュラムを通して学んだ知識は、必ずやまちづくりの現場で活かせる力となります（ですから、しっかり勉強してくださいね）。

しかし、まちづくりというのは難しいもので、知識だけでは何も動かすことはできません。まちづくりは、さまざまな人々とのかかわりの中で、一步一步、歩みを進めていくものなのです。つまり、まちづくりを担う人材、とりわけそのリーダーは、誰からも信頼される、頼もしく魅力的な、いわば人間力のある人物でなくてはなりません。このまちづくりに欠かせない人間力こそ、大学生活を通して、皆さんに鍛えあげてほしい力なのです。

さて、私の専門は、まちの景観、そしてまちの歴史です。歴史を大事にするまちほど、多くの人に愛されるものです。1期生の皆さん、ぜひ一緒に、まちづくり工学科の歴史を切り開いていきましょう。臆することなく、勇気を持って、思い切り、そしてのびのびと。

東京都新宿区神楽坂のまちなみ。都心部であっても、まちの歴史を受け継ぐ趣きある空間が残っている



准教授 **岡田 智秀** 博士(工学)



専門：景観まちづくり

- ・地元住民がいざいきと暮らせる景観まちづくり
- ・魅力あるまちの将来像を導く景観ワークショップ
- ・豊かな海辺のまちを創造するビーチフロント計画

経歴：

関東学院高校—日本大学理工学部海洋建築工学科—同大学院理工学研究科海洋建築工学専攻修士課程—同博士課程。日本大学理工学部助手、同専任講師、米国ハワイ州立大学客員研究員を経て、2011年より日本大学理工学部准教授、現在に至る。

主な学外・学会活動：

- ・土木学会 景観・デザイン委員会 震災復興委員
- ・日本建築学会コンパクト設計資料集「都市再生編」編集委員
- ・埼玉県越谷市 都市計画審議会景観専門部会 委員
- ・福島県いわき市四倉地区 復興海辺まちづくりアドバイザー ほか

私は生まれも育ちも東京都大田区（大森地区）です。

大田区は元来、神輿と山車を中心とした祭礼が盛んなこともあり、幼少のころから地元の祭礼とかかわって来ました。神輿のかつぎ手が少なくなった現在、後継者育成として、地元の子供たちに神輿のかつぎ方をはじめ、祭り太鼓・笛の演奏方法や神輿の組み立て方を教えたりしています。こうした世代を超えた付き合いが、そのまちの将来を支えるお宝作り（人材育成）になっていきます。

また、この数年、地元の区立小学校を通じて、まちづくり教育にも取り組んできました。児童とまち歩きを展開し、自分たちのまちで誇れるものを発掘する探検ごっこ（まち歩き）を実施して、たいへん喜ばれました。そのほか、東日本大震災の被災地復興をはじめ、中部地方の農村地域や首都圏近郊の中心市街地のまちづくりに継続的に取り組んでいます。

場所が変われば、人柄も地域文化も大きく変わってきます。しかし、変わらないのは、その土地で暮らす人は、その土地が今の自分にとって地元であるということ。私は、その土地で暮らす人々が、その土地をふるさとと感じられるようなまちづくりをめざして、日々、西へ東へ奔走しています。現場主義（自称；まちづくり臨床学）の「まち医者」として頑張っています。ぜひみなさんも、日本各地のふるさとづくりのプロフェッショナルをめざして、そして「まち医者」のタマゴとして頑張ってください！



いわき市発行の地域情報誌に掲載された岡田研復興まちづくり記事

准教授 **川島 和彦** 博士(工学)



専門：まちなみ整備、都市計画、観光計画

- ・まちなみの保全と創造
- ・不動産価値を高める土地利用計画
- ・中心市街地の活性化計画
- ・住民主体のコミュニティや環境の形成計画

経歴：

日本大学櫻丘高等学校－日本大学理工学部建築学科－同大学院理工学研究科博士前期課程不動産科学専攻－同博士後期課程不動産科学専攻。日本大学理工学部ポスドクター、財団法人日本システム開発研究所研究員、国土交通省国土交通政策研究所客員研究官、日本大学理工学部専任講師を経て、2012年より日本大学理工学部准教授、現在に至る。

主な学外・学会活動：

- ・日本建築学会都市計画委員会持続再生景観小委員会 委員
- ・一般社団法人淡路エリアマネジメント協議会 評議員
- ・平成都市計画研究所研究員 ほか

ご入学おめでとうございます。まちづくり工学科1期生として、大いに期待しています。

まちは住みたい、訪れたい……と思える場所である必要があると思います。そのために取り組むべきことはたくさんあり、さまざまな学問分野があります。その中で私は「まちを構成する建物が建ち並ぶときに、まち全体の視点からは“どのように”建てるべきか」を主な研究テーマとしています。ヒトが住み、働き、憩い……そのようなベースとなる空間である建物の「内」や「外」を、まち全体をよりよい空間にしていくために、どうするのか……。一緒に模索していきましょう。

皆さんに期待することをひとつ。皆さんが2年次から通学する駿河台キャンパスのあるお茶の水では、この春、ワテラスなどの大規模なプロジェクトが完成し、まちの姿が一変しました。ワテラスには、学生マンションが用意されており、地域のまちづくり活動に参加する条件で安い家賃で入居できます。わが国で初めてといわれるような仕組みがつくられており、まさにまちづくり工学科の学生にふさわしいものでしょう。私もこの地域のまちづくり活動にかかわっていきますので、「そこに住み、そのまちのために活動をしたい！」というひとはぜひ声をかけてください。充実したまちづくり工学科での4年間になること間違いなしです！



本年4月にまちびらきをしたワテラス
オフィス、住宅、商業施設、コミュニティ施設、学生マンションで構成されています。駿河台キャンパス5号館から歩いてすぐですから、ふらっと訪れてみてください

准教授 **後藤 浩** 博士(工学)



専門：防災工学、海岸工学、河川工学

- ・海岸防災からのまちづくり
- ・浜辺を楽しむビーチアクティビティ論
- ・漁港・漁村の魅力を高める空間デザイン

経歴：

千葉県立八千代高校－日本大学理工学部土木工学科－同大学院理工学研究科土木工学専攻修士過程。日本大学理工学部土木工学科助手、同専任講師を経て、2010年より日本大学理工学部土木工学科准教授、現在に至る。

主な学外・学会活動：

- ・土木学会技術推進機構2級技術者委員会主査(水工水理学系)
- ・日本沿岸域学会企画運営委員会 委員
- ・所属学会：土木学会、日本流体力学会、国際水圏環境工学会(IAHR)、日本沿岸域学会 ほか

皆さん。ご入学おめでとうございます。いろいろな思い(期待・不安など)が交錯していることと思います。私も、振り返れば20余年前、本大学に入学したてのころ、皆さんと同じようにドキドキしておりました。現在は、本学部を卒業して大学院へ進み、その後、大学へ奉職して、現在に至っております。私の専門は、河川工学・海岸工学です。河川工学分野では、波状水面を呈する河川流の実験研究や都市域で発生する洪水の浸水対策の実証研究などを、海岸工学分野では、浜辺をよりよい空間にするための方法論の提案や東日本大震災による津波の被災調査に基づく被害の減災策の研究などを行っております。このような研究成果は、皆さんの住んでいる“まち”を安全・安心なものにする一助となり、「社会に役立っている」と考え、精力的に行っております。

皆さんが、将来「社会に役立つ人間」となるためには、この大学時代での勉強・経験(遊びも含めて)が礎になります。高校では「生徒」(従って生きる人)でしたが、大学では「学生」(学んで生きる人)になります。自分の“主体的な行動”によって、世界がガラッと変わります。今、私は、卒業生と会合を持つ機会がよくあります。誰一人として、「大学のとき、ダラダラもっとサボっておけばよかった」などと言う人はおりませんよ。頑張りましょう！

伝統的河川工法“聖牛”(釜無川)

古くから人は知恵を出して、洪水から身を守る工夫をしてきており、現在でも、その効果が示され、“知恵”として守られています



准教授 **仲村 成貴** 博士(工学)



専門：地震防災、構造工学

- ・地震に強く美しいまちの施設空間
- ・災害時の避難経路を考慮したまちづくり
- ・災害時のコミュニティ形成

経歴：

錦城高校－日本大学理工学部土木工学科－同大学院理工学研究科土木工学専攻博士前期課程－同大学院理工学研究科土木工学専攻博士後期課程。日本大学理工学部助手、同専任講師を経て、2013年より日本大学理工学部准教授、現在に至る。

主な学外・学会活動：

- ・土木学会 地震工学委員会 津波避難調査小委員会 委員
- ・土木学会関東支部 学術研究部会 副主査
- ・土木学会関東支部 全国大会実行委員会幹事会 幹事
- ・日本地震工学会 津波などの突発大災害からの避難の課題と対策の研究委員会 委員 ほか

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。

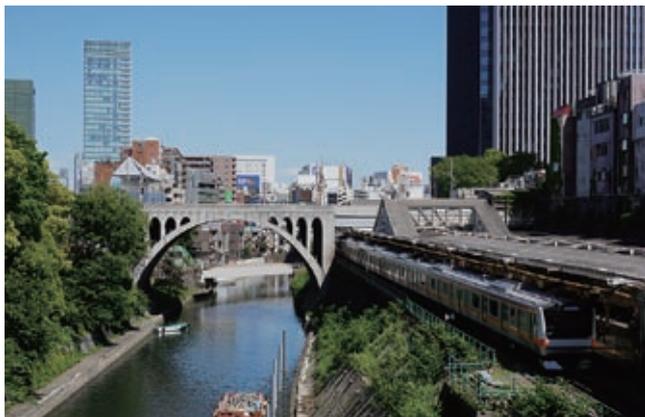
私の専門は地震防災工学です。日本は世界でも有数の自然災害多発国です。自然災害とは、地震や雨、風、台風などの自然現象が、私たちの生活に影響を及ぼすことをいいます。私たちの生活基盤はまちにあります。

災害を引き起こす自然現象そのものを人間の力で操ることは困難です。しかし、人々や社会の努力によって自然災害を最小限に抑えることは不可能ではありません。どのようにして自然災害を最小限に抑えられるのかといいますと、実は、恒久的な答えはありません。人々の生活様式や社会は時代とともに変化します。それに伴って災害の形も変化します。つまり、過去に人々が経験した事柄から学び、新しい観点を持って、自然に対処できるまちづくりに取り組むことが必要なのです。これからのまちづくりの専門家には、人々がより安全に、より安心して生活できる空間を整備する責務があります。活躍が求められているのです。

新入生のみなさん、ぜひこの新しい学科で貪欲に学んで、これからのまちづくりに大いに貢献できるように一緒に頑張りましょう。

神田川に架かる聖橋

日本災害史上、最大の被害を生じた関東大震災（1923年）の復興事業の一つとして計画、建設された橋。周辺の風景は当時と大きく変わりましたが、橋自体は当時のままで、現在も多くの人々に利用されています



准教授 **依田 光正** 博士(工学)



専門：福祉工学

- ・緊急時の福祉支援テクノロジー
- ・福祉のテクノロジーを活用したまちづくり
- ・高齢者の生活支援システム計画

経歴：

東京電機大学大学院理工学研究科機械工学専攻修士課程。職業能力開発総合大学校福祉工学科助手、同専任講師を経て、2003年より日本大学大学院理工学研究科医療・福祉工学専攻准教授、現在に至る。

主な学外・学会活動：

- ・全国障害者技能競技大会（アビリンピック）競技実施部会 委員及び補佐員
- ・東京都ホームヘルパー2級 講師（住宅・福祉用具に関する知識） ほか

まちづくり工学科新入生の皆さま、ご入学、誠にありがとうございます。心よりお慶び申し上げます。福祉学系の科目を担当する依田です。私の専門は、「福祉工学」です。福祉工学とは、あまり一般的ではない名称ですが、簡単にいえば、工学技術を福祉分野に応用することといえます。それは単に、身体的機能低下を支援するような福祉用具を作り出すばかりではなく、それらをどのように開発して、どのようにまちの暮らしの中で使い続けていけるようにするかということまで考えていかなくてはなりません。そのためには、さまざまな分野の人たちと協力しながら、福祉を実現する基盤技術を作り出していく必要があります。まちの中には、バリアフリーが行き届きつつありますし、ユニバーサルデザインの考え方によって個人の多様なニーズに合わせて行動やサービスを選択できるようになってきました。しかしながら、まちの中にはまだ多くの人たちが福祉の支援を求めています。一方、まちの中には一人ひとりの福祉に活用できる資源がたくさんあります。それらと福祉工学を活用して、よりよい福祉のまちづくりが実現できるように皆さん方と一緒に頑張っていきたいと思えます。

ユニバーサルデザインによる駅の入口。階段、エスカレーター、エレベーターからどれを使ってもよいのです



助教 **川田(押田) 佳子** 博士(工学、農学)

専門：緑地計画、造園学

- ・自然豊かなまちを創造するランドスケープエコロジー
- ・伝統的観光都市の景観保全

経歴：

兵庫県立西宮高校－神戸女学院大学人間科学部森林科学科－大阪府立大学大学院農学生命科学研究科農学環境科学専攻博士前期課程－同大学院農学生命科学研究科農学環境科学専攻博士後期課程。財団法人丹波の森協会、日本大学理工学部理工学研究所研究員（東京学芸大学教育学部環境教育実践施設研究員など兼任）、2010年より日本大学理工学部助教、現在に至る。

主な学外・学会活動：

- ・日本造園学会 学術委員
- ・八王子市 市史編さん委員
- ・レッドデータブック東京都（離島）担当 ほか



まちづくり工学科1期生の皆さま、ご入学おめでとうございます。

私の専門は「ランドスケープ」または「造園」と呼ばれる分野です。具体的には、公園や街路樹といった公的な緑、住宅など私的な緑の設計やメンテナンス、国立公園などの良好な自然風景地の保全計画、など対象は多岐にわたります。このほかにも、緑地空間と地域をつなぐマネジメントに携わるなど、「まちづくり」における重要な役割を担っています。

私がこの分野に興味を持ったきっかけは、皆さんが生まれたころに起こった阪神淡路大震災（1995年）直後の復興まちづくりを目の当たりにしたことでした。公園や広場で震災によって失われた緑を取り戻すための活動が展開されたことで、少しずつ人が集まり、徐々にまちは元気を取り戻していきました。この活動は20年経った現在でも継続され、神戸の街並みを彩っています。

まちづくりには決まった形のマニュアルは存在しないため、それぞれのまちの特徴をよく知り、それを地域に還元する方法を常に模索する必要があります。

新入生の皆さん、まずは自分が住む地域、訪れる地域を好きになって、等身大のまちづくりにかかわることからはじめてみましょう！

根岸森林公園（横浜市）

1866年に横浜の外国人居留地における娯楽施設として建設された「横浜競馬場」が公園の基礎となっており、1942年に競馬場としての役割を終えた後、戦後はしばらくアメリカ軍に接収され、ゴルフ場として使用されていました。現在は競馬場時代の遺構として旧一等馬見所を、ゴルフ場の名残として広大な芝生地を目にすることができる貴重な造園遺産です



助手 **西山 孝樹** 博士(工学)

専門：地域史、土木史

- ・中世から近世における治水・利水技術の系譜
- ・近世以前における社会基盤整備の歴史

経歴：

初芝橋本高校－日本大学工学部土木工学科－日本大学大学院工学研究科土木工学専攻博士前期課程－同大学院工学研究科土木工学専攻博士後期課程。2013年より日本大学理工学部助手、現在に至る。



今年度より、まちづくり工学科の助手を務めさせていただくことになりました西山孝樹と申します。

私は、学部3年時から土木史を研究して参りました。「まちづくり」においては、道路・港湾・鉄道などの社会基盤が整備されなければ、「まち」は成り立ちません。さらに、その「まち」は、過去の人々が積み重ねてきた歴史そのものであるともいえます。

一例を挙げてみますと、わが国に仏教が伝来してから近世初頭まで、僧侶が橋や道路などを整備していたという史実がありました。

その背景には、困った人々を助けようという仏教思想が僧侶の間に存在しており、福祉事業のひとつとして「まちづくり」が行われていたのです。このような精神は、「まちづくり」にかかわる私たちだけではなく、現代を生きるすべての人々が持つべき理念にもつながります。各時代の人々が持ち合わせた思想を振り返ることにより、そこに見出される視点を将来の「まちづくり」に活かすことができるよう、研究に邁進していく所存です。

また、高い志を持ったまちづくり工学科1期生の皆さんとともに学んでいけることを大変嬉しく思っています。まだまだ未熟な私ですが、よろしくお願いいたします。

紅葉に染まる高野山内のまちなみ（和歌山県）

近世初頭、高野山で修業を積み、豊臣秀吉から厚い庇護を受けて、各地に社会基盤整備に尽力した応其上人という僧がいた。僧らの間では、技術の伝承が山上を介して存在していたのかもしれない



客員教授 細見 寛

専門：水管理政策、国土保全政策、河川工学、水文学、海岸工学、防災工学

- ・水と緑のまちづくり
- ・津波防災まちづくりや、自然災害ハザードマップ等の防災ソフト対策
- ・公共施設の災害復旧



経歴：

甲陽学院高校－東京大学工学部土木工学科。建設省、同省京浜工事事務所 所長、内閣府科学技術政策担当参事官、国土交通省河川局海岸室長、同省中部地方整備局河川部長、同省河川局防災課長、同省河川局治水課長、同省中国地方整備局副局長、同省水管理・国土保全局水資源部長を経て、2012年9月退官。同12月より、パシフィックコンサルタンツ株式会社理事。公益財団法人全国防災協会顧問。

主な学外・学会活動：

- ・大滝ダム景観デザイン検討事務局長
- ・鶴見川流域水マスタープラン策定事務局長
- ・「第3次科学技術基本計画重点分野推進戦略（社会基盤分野）（フロンティア分野）」の策定事務局長
- ・多摩川・木曽川・天竜川河川整備計画策定事務局長 ほか

はじめまして。私は、昨年秋、国土交通省を退官し、4月から客員教授になりました。治水政策、防災政策、海岸政策、科学技術政策が専門です。行政現場では、多摩川の管理、阪神淡路大震災の復興事業などが思い出深いものとなっています。

まちづくりは、安全が組み込まれ、美しく魅力的な計画でなければなりません。そして関係者の利害調整に当たり実現しなければなりません。初めて迎える人口減少高齢社会は、新しいまちづくりを求めています。それを担える人材こそ、次の日本を再生する担い手だと思えます。学生の皆さんは、日本再生の卵。殻を破って大きく成長していただきたいと思えます。

多摩川の宿原堰

水害訴訟で最高裁まで係争された宿原堰の改築に当たっては、オールドファッションスタイルの門柱、小田急線の橋と調和した色彩、魚道の設置、堰の落水音をホワイトノイズとするサウンドスケープデザインを採用。私にとっては、堰完成直後に、多摩川の整備計画を住民参画で作成した思い出の場所でもあります



学科事務室

事務担当 加藤 慶子



「まちづくり」とはどのような学問なのだろう。

私自身は本学理工学部の物質応用学科で学んできたため、ものづくりの方が馴染みある言葉でした。けれど思い返してみれば、研究や課題に行き詰まったときには、神田の書店散策をして気分転換していた学生時代。研究室で悩んでいた時には浮かばなかったアイデアやわからなかった理論が、ふっと浮かんでくる場所。意識して利用していたわけではありませんでしたが、ずっとお世話になってきた不思議な存在は、もしかしたら「まち」だったのかもかもしれません。

同じ「まち」でも、数年経てば随分と様変わりしていて。風景が変わっていたり変わっていなかったりすることにも、きっとそれぞれに理由があるはず。ずっと試験管の中や測定機器の数値を見つめてきた私でも、対象の本質や変化を読み取るといった部分であれば、何か皆さまとお話ができるのではないかと楽しみにしています。まちづくり工学科事務室として皆さまの学生生活をサポートしていくことはもちろんですが、ちょっと変わった視点から「まち」を見てみたいと感じたら、研究に行き詰ったら、ぜひ事務室をご利用ください。皆さまをお待ちしております。

仲間と日夜一緒に研究して、悩んで、驚いて、笑って、楽しんで本学の学生生活で得たものを今度はまちづくり工学科の皆さまへ還元できるように努力していければ幸いです。第1期生の皆さま、この度はご入学おめでとうございます。



上野公園不忍池
高等学校の帰りによく寄っていたのが上野のまちでした。都会のビルの間にある大きな公園に、不思議と引き寄せられてしまいます



まちづくり工学科第1期生とスタッフの集合写真 船橋キャンパスにて
(平成25年4月15日撮影)

4月2日朝、まちづくり工学科の1期生が船橋キャンパスのガイダンスの教室にやってきた。昨年度行われた広報行事や入試で顔を見たことのある学生、面接した覚えのある学生もいた。新入生の緊張感が私ども教員にも伝わってきたが、皆はつらつとして元気そうに見えた。

初日のガイダンスには入学予定者全員が参加した。同じ付属高校出身であろう学生同士が話していたり、2月に学科主催で行ったまち歩きで知り合った者同士が話していたり……初日とは思えないような和やかな雰囲気が早くも見られ始めた。

ガイダンスでは、途中退室するものもなく、雑談も少なく、教員が説明する学生生活での注意事項、履修方法などに集中して聞き入っていた。一部の学生たちによる遅刻があり、初日から注意することにもなったが、「自ら学んでいく」大学に入学したこと、生徒から学生に変わったことを認識してもらえたら

と願っている。

1期生として入学した83名という人数は、まちづくり工学科の1年次のメイン教室となる1143教室では、大きな机の両端2列のみがちょうど埋まるくらいの人数でありちょうどよく、学習する環境も、そして教員と学生のコミュニケーションもうまくいきそうである。

クラス幹事は、1分かからずに立候補ですぐに決まった。この積極性からも1期生の新学科に対する意気込みが感じられるものであった。入学の記念に、桜の木の下で学生たちだけの集合写真を撮ったが、入学したばかりとは思えないような雰囲気がある。

新入生諸君には、初心を忘れずに頑張ってもらいたいし、このような雰囲気が継続するよう、また意気込みに応えるよう教員も頑張らねばと思う。



まちづくり工学科第1期生の集合写真 船橋キャンパスの桜の木の下で（平成25年4月4日撮影）

年間学校行事

- 6月** ● 付属高校生のためのオープンカレッジ
まちづくり工学科開設シンポジウム
- 7月** ● 駿河台入試フォーラム
前期授業終了
前期補講日
前期試験
- 8月** ● 夏季休暇
夏季集中授業
オープンキャンパス
後援会地方父母懇談会
前期追試験

- 9月** ● ガイダンス
後期授業開始
- 10月** ● 創立記念日（休校）
学部祭
- 11月** ● 理工学部英語弁論大会
船橋キャンパスウォッチング
- 12月** ● 学術講演会
冬季休暇

- 1月** ● 後期授業終了
後期補講日
後期試験
- 2月** ● 後期追試験
卒業研究発表会
修士論文審査会
- 3月** ● 卒業発表
修了発表
卒業式

まちづくりって何？

准教授 岡田智秀

まち科第1期生のみなさん、ご入学おめでとうございます！

さて、本稿の第一弾としては、私が携わる「まちづくりに関わる実践的プロジェクト」を速報します。“まちづくり”とひとえに言っても、いろいろなアプローチがあります。ここでは紙数の限りもあるので、私が取り組んでいる次の3つのアプローチを紹介します。

1. まちづくりは、地域の誇りと元気づくり

一昨年(2011年)の3月11日に、東日本地域は地震と津波による甚大な被害を受けました。いま、その被災地では復興まちづくりが取り組まれています。国の方針と地域の意向との間で考え方の違いが生じており、それが復興スケジュールにも影響が出始めています。

私は、福島県いわき市四倉町という地域で、国の方針と地元意見を集約する「よつくら海辺復興まちづくり会議」のアドバイザーとして、私の研究室の学生とともに、地元の方々が誇りと希望がもてる復興まちづくりを進めています。こうした取り組みで重要なことは、徹底して地元の方々の声に耳を傾け、その声がそのまちの将来にどれだけ重要かについて、本音で語り合うことです。お互いが本気で語り合えるまで、足かけ1年半ほど足しげく現地を訪れ、ようやくこの段階まで到達しました。この復興議論で私がこだわるのは、次世代の当地域のまちづくりを担うであろう地元児童も交えること。今年の7月くらいまでに結論を導きたいと思っています。この経過は、私の授業等でみなさんに報告してまいります。

2. まちづくりは、ふるさとづくり

いま、小さな地方都市では、超高齢社会や若者の都市部流出といった過疎問題が深刻化していて、そのまちの風景が荒廃化していくことが心配されています。私は、そうした状況に危機感を抱いており、岐阜県恵那市という田園地域を対象として、足かけ4年をかけて、美しい田園風景を守り育てる景観まちづくりを進めています。このプロジェクトでは特に、地元の大人と子供のそれぞれに、私の研究室で企画したイベントに参加してもらい、その体験を通じて、あらためて地元の美しさを知ってもらい、地元をふるさととして誇りをもってもらえる“ふるさとづくり”を展開しています。例えば、地元の子供たちとかかしをつくり、地元の鉄道や駅から見ばえの良い場所にそのかかしを並

べます。そうすると、鉄道を利用するたくさんの方たちの目を楽しませ、その姿をみた地元の子供たちも誇りがめばえてきます。また、地元の方が地域のシンボルとして大切にしている茅葺民家を、田園の暗闇に浮かび上がらせ、その美しい姿を記憶に刻もうということで、私の研究室の学生たちの手でキャンドルライトを茅葺民家のまわりに並べて、地元の方々とその美しい姿を共有しました。今年も、学生たちと現地に行ってみてまた何か新しい展開に取り組もうとワクワクしています。

3. まちづくりは、人づくり

私は生まれも育ちも東京都大田区です。そろそろ地元(大田区)に恩返しをしたいと思う年齢になり、5年ほどの時間をかけて地元で知られていない歴史的な出来事を発掘していきました。折しも、地元小学校の校長先生が地元ならではの地域学習に取り組みたいという意向とマッチして、地元小学生を対象としたまちづくり教育が実現したのです。この取り組みは小学校教育の中でも大変ユニークであるとして、「教育新聞」にも取り上げられました。

以上のように、まちづくりとひとえに言っても、対象とする人物、地域、目的によって、そのアプローチは多種多様です。だからこそまちづくりは面白い！ここで紹介した以外の4つ目、5つ目のアプローチをぜひまち科1期生のみなさんと考えていきたいと思えます。

ガンバレ！ まち科1期生。まち科の伝統・文化と誇りを共に磨こう1期生たちよ！

▶復興まちづくりワークショップ風景 (2013.3.3)



▲新聞で紹介されたカカシ元気づくりプロジェクト



▶小学生と大学生による地元(大森・羽田地区)まち歩き

column (私とまち)

歴史とにぎわいと 交通拠点の わがまち千住

教授 天野 光一

北千住駅周辺に広がる千住は私が生まれ育った町である。千住は家康江戸城入城後、日光道中、奥州道中の一番目の宿場として開かれ、品川、新宿、板橋と並んで江戸四宿と呼ばれたまちである。もっとも本陣は現在の荒川放水路（ここは荒川でなく放水路といわなきゃ、昭和5年に完成した人間が掘った川だもの）のそばであり、私の出身は仲町でもともと掃部宿と呼ばれたところである。掃部宿は家康江戸城入城後の慶長3（1598）年、石出掃部亮吉胤が新田開発を許され開発され、後に千住宿に統合された。私の住まいは旧日光道中に面しているのだが、その斜め向かいが、その開発者の末裔の石出さんで昔文房具屋だったので、子供の頃買い物に行ったものである。旧日光道中沿いの土地は街道まちにありがちな縦長のいわゆるウナギの寝床であり、私の住まいも借地ではあるが、間口四間奥行き十九間である。仲町の商店街は今や寂れた商店街であるが、歴史あるまちなのである。仲町を離れ、千住大橋のそばに行くと、芭蕉の碑がある。皆さまもご存じ、芭蕉は奥の細道で、千じゅと云所にて船をあがり、「行春や鳥啼魚の目は泪」と詠んでいる。場所を変えれば、鷗外も住んでおり、そもそも鷗外が千住のことを意味している。やや専門的ではあるが、千住は知る人にとっては、歴史と文化のまちなのである。ちょっとうらやましいでしょう。

にぎわっている北千住駅周辺を見てみよう。駅前から延びる商店街、それに直行する旧日光道中のいくつかの商店

街、駅近傍からの裏通りの飲み屋街それぞれにぎわっている。北千住駅には、常磐線、千代田線、日比谷線、東武線、つくばエクスプレスと5線も鉄道が入っていることもあって、乗降客、乗換客でにぎわっており、駅周辺には、大規模な店舗が、駅ビルのルミネ、すぐ脇の丸井、駅前通りのイトーヨーカ堂、この店はヨーカ堂の第一号店で駅前通りは昔羊華堂通りといわれていたのだ、旧日光道中沿いのダイエー系列のトボスト、4つもある。このような場合通常は大規模店舗に圧倒され、個別の小規模店舗の元気がなくなってしまうが、千住は実にはにぎわっているのである。比較的広い道のにぎわっている商店街、それらの道をつなぐ迷ってしまいそうな細い道とそこに林立する居酒屋や飲食店。昼間も夜も歩いていて飽くことがない。まあ、千住の住人はよほどのことがない限り千住で用事を済ませてしまう。だっていかにも楽しそうだと思いますか。

私は、パリにも住んだし、フランスの田舎町も訪問した。しかし、生まれ育った千住をこの上なく愛している。学生諸君を含んだわれわれは愛せるようなまちをつくる努力をしなくてはいけないでしょう、せっかくまちづくりを専門として選んだのだから。



◀旧日光街道商店街（昭和41年）
（出典『目で見る足立・荒川の100年』）



▶旧日光街道商店街（現在）
（昭和41年の写真と同じ場所から撮影）

ロゴマーク紹介

まちづくり工学科のロゴマークができあがりました。「まち」という多様な生活空間を、動きのある曲線でダイナミックに表現しています。2つのラインには、「人」という文字が表現されています。

デザイン：信田昌宏（株式会社 こまや スタジオフォーム） 監修：株式会社 GK 設計



■ 平成25年度 1年生担任連絡先

〈専門〉

城内 博

研究室：駿河台598B

電話：03-3259-0879

メール：jonai.hiroshi@nihon-u.ac.jp

川島 和彦

研究室：駿河台594A

電話：03-3259-0723

メール：kawashima.kazuhiko@nihon-u.ac.jp

〈一般〉

林 誠

研究室：船橋846A

電話：047-469-8726

メール：hayashi.makoto@nihon-u.ac.jp

内堀 奈保子

研究室：船橋543B

電話：047-469-8179

メール：uchibori.naoko@nihon-u.ac.jp

■ 学科事務室

〈授業実施期間の月曜から金曜〉

船橋キャンパス 6号館 2階621B室

開室時間：12:15～13:15

電話：047-469-5438

メール：machi@town.cst.nihon-u.ac.jp

〈上記以外の平日〉

駿河台キャンパス 5号館 2階525室

開室時間：10:00～17:00

電話：03-3259-0531

編集 後記

平成25年4月1日、日本大学理工学部にまちづくり工学科が誕生しました。そして、学科の最新情報を伝える学科情報誌『まち』も創刊です。創刊号では、記念すべきまちづくり工学科第1期生の様子のほか、学科スタッフの自己紹介とまちづくりにかける熱き思いをお届けしました。『まち』は、年2回の発行を予定しています。歩みを始めた学科の様子を、毎号着実にわかりやすくお伝えしていきます。（貴）